

「おいおい、それは何かの間違いだよ。俺はみみずくの病気なんて治してやったことはないしたぬきの父さんやウサギのバアさんだって治しちゃいないよ。もっとも、たぬきの子は昨夜来て、楽隊のマネをしていったがねー。あはは」ゴーシュはあきれてその子ねずみを見おろして笑いました。すると野ねずみのお母さんは泣きだしてしまいました。「ああ、この子はどうせ病気になるならば、もっと早くなればよかった。さっきまであんなにゴウゴウゴウと鳴らして

おいでになったのに、この子が
病気になると一緒にピタッと音
が止まって、もうあとはいくら
お願いしても鳴らしてくださら
ないなんて。何て不幸せな子供
なんだろう」ゴーシュはビック
リして叫びました。「何だと、
僕がセロをひくと、みみずくや
うさぎの病気が治るだと。どう
いうことだ、それは」野ねずみ
は目を片手でこすりこすり言い
ました。「ここらの者は病気にな
ると、みんな先生のおうちの
床下に入って治しているのでご
ざいます」「すると治るのか」

「体中とても血のまわりがよくなって、大変いい気持ちですぐ治る方もあれば、うちへ帰ってから治るかたもあります」「ああ、そうか。オレのセロの音がゴウゴウ響くと、それが響いて